りを持とうとしているのかもしれません。こう考えればその行為を止めるより先に、壊してももう一度つくりかえることの出来るもの、それ自体がこわれてしまわないもの、そして大事なことは友だちに当ったりしても危なくないものなどということに配慮しながら、保育環境としての玩具を用意することが肝要となってくると思います。そして壊したことを叱ったりとがめたりするのでなく、その玩具をなかだちとして友だちとのつながりを持つ方向へと進めていくことが出来るように、保育者自身前向きの気持ちを持ち、環境を通しての教育や、子ども同士のかかわりを考えていくことなどが大切なのだと思います。

来年度の新教育要領の実施を目前にして、環境を通して行う教育を考えるとき、子どもが環境とかかわっていきいきとした生活を展開していくために、発達の時期に即した環境、玩具のあり方を再検討していくことも私ども保育者にとっての課題となってくると思います。なおまた、忘れてはならないことは幼稚園の年令段階では子どもの一人一人の発達や興味の個人差が大きいので、年令とか時期などを考える以上に重要視しなければならないのは、一人一人の子どもの発達や興味によく合った玩具が必要なのだということです。こういったものがある中で、それらを使って思う存分遊びこんでいけるような場があり、またそれに加えて多くの有意義なものを合わせもった環境があることが、子どもをよりよく伸ばす上に役立つことは明らかなことといえると思います。

（お茶の水女子大学附属幼稚園）

〈ままごと道具〉考
――インドネシアの場合――

渡邊美津子

① 家庭でままごと遊びをする子どもたち

ままごと遊びに欠かせない〈ままごと道具〉は、世界各地に散在し、子どもの世界で古くから絶えることなく愛されている魅力的なおもちゃのひとつである。おとなにとっても、また、あのぬくぬくとしたなま暖かい子どもだったところを追想させ、そこにそれぞれの喜怒哀楽の心の住家を見いだし得る〈童具〉であるといえるだろう。

〈ままごと道具〉が長い間存在し続けているのは、使い手である多くの子どもたちによって受け入れられ、支持されている証であるが、「ままごと」が人間にとって無意識の「原初的な営み」と無縁ではないからであろう。しかしながら、一般に売られている〈ままごと道具〉となると、作り手であり与え手であるおとなの側の思惑が、必然的に〈道具〉に投影されるはずである。〈ままごと道具〉を見れば、それぞれの地域の、それぞれの時代の、その時々のおとなが子どもに託す思いや人々の暮らし（おもに食をめぐる生活文化）もみえてくるだろうと思う。

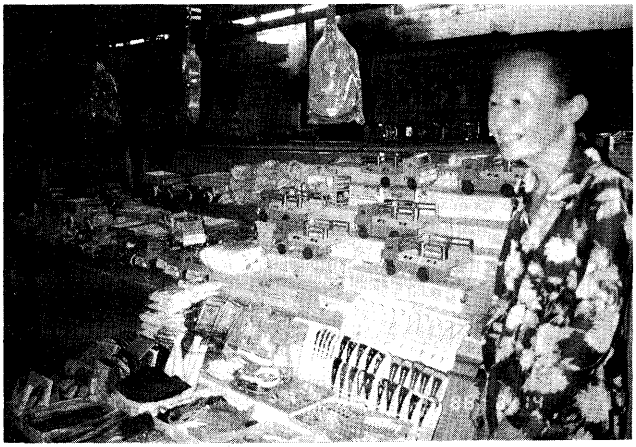
上述のような視点で数年前から世界各地の〈ままごと道具〉を捜し求め、研究している。ここでは、昨年、訪ね歩いたインドネシアの〈ままごと道具〉について紹介しようと思う。

ジャカルタ、ジョグジャカルタで〈ままごと道具〉を捜し求め、幼稚園のままごとコーナーや家庭で遊ぶ子どもたち（写真①）を観察し、市販されている〈ままごと道具〉を見て歩いた。その結果、子どもたちに使われている〈ままごと道具〉は、素朴で親しみのある素焼きの鍋や釜、明らかにビスケットなどの空缶の再利用とわかるブリキの中華鍋やお玉とヘラ、赤や青などの色彩を入れて細かく編み上げられた竹のザルや籠、その他木製、鉄製やプラスチック製のものであった。（写真②）

インドネシアでは、子どものおもちゃだけを専門に売るいわゆる玩具店に相当する所が見当たらなかった。〈ままごと道具〉が売られていた場所は、都市では市場の店（写真③）、村では幹線道路添いの店先であ

② インドネシアの
ままごと道具

③ ジャカルタの市場内の
おもちゃを売る店



り、それも日用品と一緒に並べられていた。唯一のおもちゃだけを売っていたのは、市場の入口の小さな屋台や路上の仮店であった。また、台所用具を扱う荒物屋でも小型の鍋やすりウスがみつかり、一目で〈ままごと〉用であることがわかった。母親は買物についてきた子どもにせがまれれば、買って与えるということだが、すりウスなどは、小さいものも実際の調理で使うこともあり、小型の用具は子どももおとなも共用し、必ずしも両者の間にはっきりとした境界線があるわけではない。

インドネシアの〈ままごと道具〉には、炊事のための加熱具、調理具、貯蔵具はあるが、饗応のための配膳具がほとんど見られず、食料品については皆無である。「料理をつくる」ことのほうが中心で、ままごと遊びのもうひとつの重要な要素である「客をもてなす」ことにあまり関心がないのだろうか。子どもたちが自分達のつくった料理で「客をもてなす」遊びをしないとは考えられない。インドネシアの人々は、最近では都市でスプーンとフォークを使っているが、基本的には古くから手で食べる習慣がある。豊かな自然に恵まれた環境から察してみても、「客をもてなす」ための道具がないのは、おそらく、手近な自然物を食器や食料の代用として遊んでいるため、単に市販用のおもちゃとしては存在しないだけなのではないだろうか。

柳田国男は、「おもちゃの起こり」を次の三つに分類している。(1)自然にある、手近なものを利用する代用玩具、(2)おとなの生活用具を小型にした転用玩具、(3)子ども用に作られたものを買って与える専用玩具である。インドネシアの〈ままごと道具〉は、その販売方法を見る限り、荒物屋では柳田のいう転用玩具に相当するが、市場や道路添いの店先では転用玩具から専用玩具へ移行する、まさに狭間の様態を示しており、自然物の代用玩具も合わせると、柳田の三分類とは異なる三種の玩具が同時に並存しているという非常に特異な状態である。

また、〈ままごと道具〉のなかにはすでにおとなの生活用具として使われていないものも混在しており、意外に古い時代のものをモデルにしていることがわかった。米の料理法である「ザル取り法」に使うアルミの深鍋や竹のザル、惣菜の料理に使う土鍋、食糧の貯蔵のための素焼きの壷や鍋と竹の籠など、今では農村の一部でしか見られないという。このことは、子どもたちが自分達の知らない時代の道具をわざわざ欲しがるとは考えられず、祖先の生活を子どもに伝えたいというおとなたちの思いのあらわれではないだろうか。これらの古い道具は、先祖を大切にするおとなの心を〈道具〉に託し、子どもの成長を願って与えたものだと思う。

素焼きの〈ままごと道具〉が、もともと子ども用ではなく、人々の祝祭儀礼のための容器であったことは興味深い。インドネシアのジャワ地方には、イスラム教、ジャワ教、キリスト教その他様々の世界宗教の信者がいるが、ジャワの人々が共通に信じているのは、祖霊や悪霊の信仰である。そのためにスラマタンという、あらかじめ祈りを捧げておいた料理を一緒に食べる儀礼を行ったり、小さな容器に花、香、食べ物などの供物を捧げたりする。現地の人々の話から、おとなたちの「ハレの日」に子どもたちは目を凝らしてながめ、儀式の終わるのを待って空いた容器をおとなにねだり、自分達の「ケの日」に〈ままごと遊び〉に打ち興じるのだという。本田和子が「ままごと」は「聖なるもの」に根ざし、「女の始まるとき」であると指摘しているが、まさに的確な鋭い考察である。スラマタンは結婚、妊娠七カ月、生死などの人生の節目に行われる通過儀礼であり、とくに女の子にとっては、否応なしに「女を意識するとき」であるだろう。女たちが普段とは違う厳粛な面もちで調理し、祈り、共餐する世界に、子どもたちは簡単に同化し、霊に憑かれたかのように、ただ黙々と「料理をつくる」ことに専心する。儀式で使われた小さな容器が「ハレの日」を蘇らせ、さらに自分たちの世界を独自なものにしてくれる

のだろう。こうした素焼きの〈ままごと道具〉は、子どもがおもちゃとして自ら選んだ玩具である。柳田はおもちゃの誕生の原点として人々の「信仰」をあげているが、ここに、子どものおもちゃが誕生するひとつの姿を見せてくれていると思う。

日本で「ままごと」という名称が普及し始めたのは、江戸時代であり、商品としての〈ままごと道具〉も売り出された。木地の〈ままごと道具〉の誕生過程には、日本のおとなたちが子どもへの思いを〈道具〉に託してきた、ひとつの源流を見ることができる。インドネシアの〈ままごと道具〉が示す様相は、日本の〈ままごと道具〉の誕生までの経緯と絡み合わせてみると、さらにおもしろいのではないかと思う。

〈文献〉

柳田国男「子ども風土記」角川書店、一九六〇
柳田国男「小さき者の声」角川書店、一九六〇
本田和子「子どもたちのいる宇宙」三省堂、一九八〇
前川健一「東南アジアの日常茶飯」弘文社、一九八八
ケンチャラニングラット編「インドネシアの諸民族と文化」めこん、一九八〇
今井田道子・渡邊美津子「〈ままごと童具〉と子ども(1)」日本保育学会第四〇回大会研究論文集、一九八七
今井田道子・渡邊美津子「〈ままごと童具〉と子ども、その1インドネシアで出会ったままごと童具、その2インドネシアの食生活とままごと童具」日本保育学会第四二回大会研究論文集、一九八九

（国際音楽学校）